

開催地名	神奈川県 逗子市
開催日時	令和7年2月22日(土)10:00~11:30
開催場所	逗子市役所5階会議室
語り部	石川 善憲(茨城県日立市)
参加者	逗子市民 45名(会場聴講33名、オンライン聴講12名) ※逗子市防災安全課職員8名
開催経緯	昨年1月1日に「令和6年能登半島地震」が発生した。また同年8月には「南海トラフ地震臨時情報(巨大地震注意)」が発表された。この巨大地震が30年以内に発生する確率も70~80%であったものが、本年1月には80%程度にまで引き上げられた。このような今こそ、過去の大震災の経験談を直接聞く機会を設け、市民の防災意識向上、ひいては地域防災力の向上を図りたい。
内容	(1)はじめに 久慈学区コミュニティ推進会の会長として、「一人の犠牲者も出さないこと」をスローガンに、地域行事を通じた学校や住民との連携強化に努めている。東日本大震災では久慈中学校の校長として、2000人以上の市民を受け入れ、避難所運営を指揮した経験を持つ。 近年、日立市では災害に強い市役所を建設したものの、一昨年の台風13号では水没し、大きな被害を受けた。この時はレベル3の警報を待たず、いきなりレベル4の警報が発令されるほどの降水量となった。日立市は比較的災害が少なく、河川の氾濫もほとんどなかったが、このときは内水氾濫により道路を伝って水が溢れ、市内各地が浸水する事態となった。 東日本大震災の際、茨城県は元々災害が少なかったことから、避難所の備蓄がほぼない状態だった。行政の援助が届くまでに3~4日を要したことを踏まえ、事前の備えの重要性を改めて考える必要がある。現在では防潮堤の設置、水防対策の強化、避難所の備蓄充実などが進んでいるが、それでも「非常時に何が起こるかわからない」ことを常に念頭に置いてほしい。 (2)日立市久慈町とその特徴 日立市久慈町は、日立港の一部に位置し、観光地としてはひたち海浜公園や映画「君の名は」の聖地とされる大甕神社がある。また、日産自動車の積出港やメルセデスベンツの受入港としても知られている。しかし、3キロ圏内には東海第二原発やLNGガス基地があるため、災害時には特に注意が必要な地域でもある。 (3)東日本大震災の被害と避難所運営 ◇ 津波の被害 当時、津波はハザードマップ通りに侵入し、家や車、漁船などを押し流した。水が引いた後も、海底のヘドロが道路に残り、歩行すら困難な状態だった。日立港では車両1400台が炎上し、大規模な火災も発生した。海水は電気を通すため、バッテリーが燃えやすく、海水に浸かった車が爆発する事故も起こった。 ◇ 避難所開設と混乱 震災が発生したのは卒業式の2日後で、帰りの会の最中だった。地震の揺れが長く続いたため、避難開始の号令を出すタイミングが難しかった。築40年の校舎の耐震性を考慮し、揺れが少し収まった時点で避難を開始。生徒たちは危機感を覚え、普段の避難訓練の半分の時間で静かに避難を完了した。 その後、学校には避難者の車が殺到。駐車場整理を徹底し、緊急車両や物資搬入経路を確保した。体育館にはシートを敷く余裕もなく、人々を収容。避難所に指定されていたものの、備蓄がほぼない状態で、支所から毛布70枚を確保し、校内のあらゆる容器に水を貯めた。明るいうちにテントを張り、本部を設置。気が付けば、体育館に1500人、校庭に500人の計2000人以上が避難していた。 (4)避難所での生活と助け合い ◇ 資源の確保と分配 地域の防災倉庫にはほとんど備蓄がなかったため、リアカーで近隣を回り、毛布の提供を依頼した。返却できないと伝えても、多くの住民が提供してくれた。しかし、すぐに配布し尽くし、整理券を配ることで混乱を防ぐ工夫をした。 携帯が不通だったため、学校には全国から安否確認の電話が殺到。職員3人が常駐し、体育館

	との連携を取りながら伝言板を活用し、避難者の家族との連絡を支援した。 また、目の不自由な避難者がパニックにならないよう、保健室や校長室に誘導するなどの配慮を行った。女性避難者からの提案で、幼児や高齢者のために図書館の本を持ち込み、紙おむつも準備したことで、避難所のストレス軽減につながった。 ◇ 食料と炊き出し 飲食店などから野菜や食品が届き、調理器具の提供も相次いだ。近隣住民だけでなく、新潟県から炊かれた白米も届けられ、地域全体で協力しながら炊き出しが始まった。 ◇ 子供たちの貢献 避難所では常に人手不足だったが、中高生が積極的に手伝い、運営が円滑に進んだ。特にトイレの管理では、タンクの水が流れなくなったため、子供たちが夜間も手動で水を汲み続け、「ここは任せてください」と率先して行動した。 子供たちの笑顔が避難者の心の支えとなり、感謝の言葉が多く寄せられた。学校のホワイトボードには感謝のメッセージが残され、避難所での貢献が地元新聞や道徳の教科書にも掲載されるほど評価された。 (5)久慈区コミュニティの防災活動 東日本大震災の経験を生かし、久慈コミュニティでは以下の防災活動を推進している。 ・マイタイムラインの作成:各家庭が災害時取るべき行動を具体的に計画 ・防災訓練の実施:台風シーズン前に地域ぐるみの訓練を行う ・災害時のレシピ紹介:非常食を活用した調理法を紹介 ・小学生対象の防災講座:子供のうちから防災意識を高める教育を実施 また、新たなコミュニティプランの策定に向けて、地域住民にアンケートを実施し、運動会や祭りの行事を増やしている。その理由は、子供から大人までがコミュニティに積極的に関わり、地域と学校の協力関係を築くことが、非常時の連携強化につながると確信しているためである。 (6)まとめ 東日本大震災での経験を踏まえ、事前の備えと地域のつながりが、災害時の生存率を大きく左右することを再認識する必要がある。災害はいつ発生するかわからないが、日頃からの訓練と地域の協力があれば、被害を最小限に抑えられる。「一人の犠牲者も出さないために」、地域全体で防災意識を高めていくことが求められている。 
開催地より	久慈中学校の生徒たちが自発的に避難所の運営を行っている姿は市民及び職員に強い感動を与えた。語り部に話していただいた内容を、避難所運営の実例として当市の避難所準備に活かすとともに、今後も市民に対し自助、共助の重要性について啓発していく。